

『水ぬるむ』

桑原 紀子

2月20日。青空と暖かい陽射しが、春の訪れを感じさせてくれます。冬の長い寒さもやっと終りに近づく予感に、じっとしていられなくて、ひとり自転車で遠出をしました。

行き先は山間の湿地。水辺。水ぬるむという言葉のように、春の予感は生き物を水辺に誘います。

40分も走ると、多摩丘陵の面影の残る里山と田んぼの風景が見えてきます。まだ一面枯れ草色の風景ですが、ここは沢山の種類の生き物の暮らす世界です。冬の間ひっそりと耐えてきた者たちは、まだ眠っているのでしょうか？

自転車を止めて、水の溜まった窪みを覗いてみました。黒い影がさっと隠れました。メダカの群れのような小魚たちです。小魚たちが、ドキドキしているのが分かります。



そっと離れて、また自転車で別の谷戸に行きました。

山合いに向かって棚田のように続いている休耕田には水が溜まっていて、奥に進むと、アカガエルの卵塊がいくつも見つかりました。水を吸って膨らんだ透明な寒天質の中に、小さな黒い粒が沢山光っています。この粒がだんだんオタマジャクシの形になっていくので、丸い小さな粒は、生んで間もない卵と思います。昨夜かその前夜、この谷戸は沢山の蛙たちのラブコールで満ちていた事でしょう。そしてきっと今夜も、夜になると、蛙たちが谷戸に集まって、命の饗宴が繰り広げられるのでしょう。水溜りにはタニシの這った地図のような線も残っています。

2月の水辺で、生きもの達はもうとつくに目覚めて、春の活動を開始していたのです。